

愛知県指定文化財		
① 絹本着色 花鳥図	2幅	
県文 中国明時代 馬島 明眼院蔵		
		

② 絹本着色 花鳥図	1幅	
県文 中国明時代 馬島 明眼院蔵		
		

③ 絹本墨画 風神雷神図	2幅対	
県文 江戸初期 馬島 明眼院蔵		
		

④ 紙本墨画 円画山水図	1双	
県文 桃山時代 馬島 明眼院蔵		
		

⑤ 茶箱	1台	県文 江戸初期 馬島 明眼院蔵
		

⑥ 陶製呂宋茶壺	1口	県文 江戸時代 馬島 明眼院蔵
		

⑦ 金剛鈴杵	1口	県文 中国唐時代 馬島 明眼院蔵
		

⑧ 古萩茶碗	1合	県文 江戸時代 馬島 明眼院蔵
		

①～⑦写真：名古屋博物館提供

国の登録有形文化財		その他の文化財	
			
			
			
大日如来坐像を安置することから、「大日堂」とも呼ばれる。室町時代に方三間の多宝塔として建立されたと伝わるが、濃尾地震の被害により、一層に改築された。江戸時代、また室町時代とみられる部材も多く、当初材を残しつつ、守り伝えられてきたものである。		① 大威徳明王像 1軀 平安後期 砂子 自性院蔵	② 色々威鎧 1領 馬島 明眼院蔵
			③ 神輿 1基 馬島 大治町蔵
① 明眼院旧多宝塔 1棟 室町時代 馬島 明眼院蔵	④ 神輿の帳 1枚 馬島 大治町蔵	⑤ 観音菩薩坐像 1軀 江戸初期	⑥ 観音菩薩坐像 1軀 江戸初期
			
⑦ 観音菩薩立像 1軀 江戸初期	⑧ 阿弥陀如来立像 1軀 江戸初期	⑨ 華鬘 2枚 砂子 自性院蔵	⑩ 念珠 1連 砂子 玉泉寺蔵
			
⑪ 村絵図 1枚 八ツ屋 伊藤 正子氏蔵	⑫ 版木 明眼院境内之図 1枚 馬島 大治町蔵	⑬ 織部灯籠 1基 江戸中期 馬島 明眼院蔵	⑭ 粉糠田水準起点 1基 西條 田之社
			
⑮ 道標 1基 砂子 大治南小学校	⑯ 安井将監秀久之墓 1基 中島 建宗寺	⑰ 八屋孝女塚 1基 八ツ屋 郷内地区	⑱ 栗田直政記念碑 1基 砂子 栗田久子氏宅
			
⑲ 扇骨の製作 西條地区	⑳ センダン 1樹 堀之内 大治小学校	㉑ アキニレ 7樹 中島 神明社	㉒ マルバヒイラギ 1樹 西條 殿池神社



大治町の指定文化財											
① 宝篋印塔	1基	② 木造 薬師如来坐像	1軀	③ 鰐口	1口	④ 飯食器	1口	⑤ 小堀遠州書状	1幅	⑥ 尾州海東郡馬嶋村薬師領御縄打帳	1綴
町文 南北朝 馬島 明眼院蔵		町文 平安時代 砂子 自性院蔵		町文 室町中期 砂子 自性院蔵		町文 室町後期 馬島 明眼院蔵		町文 江戸初期 馬島 明眼院蔵		町文 江戸初期 馬島 明眼院蔵	
											
宝篋印陀羅尼經を納めるための石塔である。後には追善塔として、墓塔にも用いられた。 相輪の上部および笠の隅飾の一つが欠失している。塔身の四面に梵字が陰刻されるが、風化のため判読が難しい。隅飾はごくわずかに外側に傾斜をみせ、柔らかな丸みをもった穏やかな垂弁が特徴である。		本堂正面の厨子に、秘仏として安置される。 絵の一本造で、漆箔を施す。左手に薬壺を持ち、右手は施無畏印を結ぶ。ふっくらとした豊かな体の張りを持ち、地髪と肉髻に段差を設けない点に特徴がある。柔らかな衣文が刻まれた、美しい仏像である。		寺院の堂前に吊るして鳴らす梵音具である。刻銘により、文明18年(1486)に自性院の前身寺院である成願寺に「河崎右京亮直貞妻女」が寄進したことが示される。大型の鰐口である。		飯食・菓子などを盛って仏に供える、今の仏飯器にあたるものである。高台内底裏に、「御仏器藤原正秀奉寄進美江寺観音天文十年正月十九日明眼院」と刻んであり、そのうち「明眼院」の刻銘は、後から刻まれたものと思われる。		小堀遠州(1579～1647)が明眼院宛に送った書状である。遠州と明眼院住高台内底裏に、「尾州海東郡馬嶋村薬師領御縄打帳」と刻んであり、現在の土地台帳である。		慶長13年(1608)伊奈備前守忠次等を奉行として尾張藩で最初に検地を行ったとき、村方に残された1通の写し(備前検地)である。 田畑の品等・面積・所有者(塔頭・農地)の名があげられており、現在の土地台帳である。	
											
名古屋を中心に活躍した日本画家 森村宜桶(1871～1938)が描いた花鳥画屏風である。宜桶の父・大朴が光暁寺の北隣「木犀校」で漢学を教えた縁で、その受講生から寄贈された。12か月を象徴する年中行事、風景、故事などが、鮮やかに描かれる。		門の左右に立ち、両目を見開いた忿怒の相で寺域を守護する仏像である。向かって右側の阿形像は口を大きく開き、左側の吽形像は口を閉じ、左右逆の姿勢をとる。阿形の左腰に刻まれた渦巻きが特徴で、力強く荘嚴な姿の像である。		多宝塔に安置された、寄木造・玉眼・漆箔が施された像である。大日如来の印である智拳印を結ぶ。全体的にゆったりとした作風で、衣文が浅く穏やかで、平安仏のような落ち着きを感じられる。		神楽太鼓は五穀豊穡を願って神楽屋形に設置されている大小2つの太鼓を細い竹バチで叩く演奏方法で高い音色に特徴がある。嫁獅子は男性が獅子頭をかぶり御幣と鈴を両手に持ち女形の所作で悪魔払いのために「幣の舞」「鈴の舞」などを奉納する、17世紀に起源をもつ芸能である。いずれも町内では江戸時代後期から伝承されている。					

⑨、⑩写真：愛知県史観さん室提供

